

平成29年10月27日

## 「高師浜にミニ砂浜をつくろう会（第2回）」活動の概要

- 主 催 CIFER・コア（一般社団法人 大阪湾環境再生研究・国際人材育成コンソーシアム・コア）
- 協力団体 大阪府水産課・港湾局、高石市、高石市教育委員会、高石市漁業協同組合、高石市立羽衣小学校、高石市立高陽幼稚園、大阪湾見守りネット、浜寺公園自然の会、公益財団法人大阪府漁業振興基金栽培事業場栽培漁業センター、レッツビギン、NPO法人大阪府海域美化安全協会、さざなみ会（順不同）
- 参加者数 155名
- 活動内容 13:00 開会  
13:15 清掃活動  
13:35 植栽セレモニー（クロマツ5本）  
（高石市長、高陽幼稚園園児、羽衣小学校児童、外）  
13:55 稚魚放流（ヒラメ200匹）  
（高陽幼稚園園児、羽衣小学校児童）  
14:30 終了



### CIFER・コア 矢持進 理事の挨拶

大阪の海は30年前に比べきれいになってはいるが、浜は足りていない。高石市の持っている数少ない砂浜をメンテナンスし、できるだけ拡大していくことは、海の生物にとって非常に重要なことであり、本日参加される方々には少しでもそのような意識を持って取り組んでいただきたい。

今日は子どもたちにも稚魚放流を通じて海に親しんでもらうが、大阪の海をよくするには、どれだけ人を浜辺に近づけるかということが最も必要なことだと考えている。



### 阪口伸六 高石市長のご挨拶

現在高石市の砂浜は、唯一この高師浜を残すのみとなったが、かつては海水浴に100万人が訪れる一大観光産業の町であった。明治末期から大正初期にかけて大阪中心部から避暑客を招くために鉄道、駅が整備され、さらにリゾート住宅が建てられて高級住宅地としても開発されるなど、砂浜がもたらしたまちづくりが進み、それが高石の基礎となっている。

高度経済成長期には産業基盤を作るために臨海コンビナートを招き、浜寺公園の保全、府営プールの整備などを行っている。東日本大震災では東北に向けて大量の石油を運んだこともあり、人々の生活、日本全体のエネルギー確保のため働いてくれている。今回の催しがこのような歴史の変貌を見てきたこの高師浜を守り、未来に向けて残す新たなスタートとなることを願う。

植栽セレモニー（写真右）  
黒松に砂入れをする羽衣小学校の  
児童、高陽幼稚園の園児たち

浜辺の清掃活動の様子（写真右）



ヒラメの稚魚放流の様子

平井 研先生（株式会社総合水研究所）の説明を受けた後（写真下）、児童、園児たちによる稚魚放流が行われた



子どもたちはイベント後、アンケートに次のような感想を寄せてくれました。

高陽幼稚園園児の感想

- ◆ たのしかった。うみのなかでおおきくなってほしい。
- ◆ おおきくなってもどってきてね。たのしかった。

羽衣小学校児童の感想

- ◆ ヒラメはさいしょ「こわい」と思ったけど、ほうりゅう前はワクワクしました。
- ◆ すごくひらめがかわいかったし、さかながもっともっとすきになった。
- ◆ ヒラメの子どもがいっぱいて、子どもなのにとても大きかったです。ヒラメはとてもヌルヌルしていました。いっぱい虫がいてちょっといやだった。



## ■ 事務局から

大阪府港湾局が平成 28 年度に高師浜の背後にある防潮堤の補強工事を行い、工事機材の基盤として約 400 m<sup>3</sup> の海砂を敷きならしたので、今年度の本イベントでは砂撒きを行いませんでした。この大量の砂の一部が干満や台風により流れ出て、水際線から数 m 先の海にまで広がっている様子は本来の砂浜のようです。

砂撒きに代わり、黒松を 5 本植樹することになり、阪口高石市長、田代高石漁業協同組合長等が松の根元に砂をかけ、次いで高陽幼稚園園児、さらに羽衣小学校児童が砂をかけました。また園児・児童は大阪府栽培漁業センターから提供されたヒラメの稚魚の放流も行いました。こんな経験をした子どもたちは高師浜や自然に大きな愛着を持って成長するものと確信します。

ヒラメの放流では、放流した子どもたちが次のグループが待っているにもかかわらず、じっと水際を眺めているためにイベントが進行しませんでした。何をしているのかと覗き込むと、放流したヒラメが沖へ泳がず、体を動かしながら砂の中に潜る様子を観察していました。子どもだけでなく大人にとってもこんな生きた経験はめったにないことだと思うので、子どもたちの放流が終わってから、砂浜の清掃に参加していただいた人達にもヒラメを放流してもらったところ、大変喜んでいただきました。

日頃からこの砂浜を清掃している男性から聞いた話です。八尾市の中学生 2 人が海を見たくなくて、自転車で直線距離でも 20km はある高師浜までやってきたそうです。この浜に関して知っていることを教えてあげると 2 人は帰りました。しかし少し経ってから、その 2 人がお母さんから親切にいただいた男性にお礼を持っていきなさいと言われ、再びやってきたそうです。カメの恩返しのような話だと思って聞きましたが、男性は最近の親や子どもにもしっかりしている人はいるものだと言っていました。海が繋いだ一つのお話です。

万葉集に歌われた高師浜も今は眼前に巨大コンビナートが広がっており、この景観をかつてのように戻すことはできませんが、この残された貴重な砂浜を、近隣だけでなく、遠来の人にも楽しんでいただけるように残したいものです。